

本書は、生命倫理と呼ばれる一連の問題群のなから六つのテーマを取り上げて論じた教科書である。こんにち、生命倫理の教科書は実に多種多様なものが公刊されているが、本書は以下のような点で、一般の教科書とは異なっている。

第一に、多元的な視点から問題を扱っている点だ。これまでの教科書は、生命倫理と言いつつも、生命工学や医療技術を中心としたもの、法律問題を扱うもの、倫理問題を扱うもの、さらには宗教論、文化論など、特定の専門的な視点から書かれたものが多い。これに対し、本書は、タイトルにも示されているように法と倫理に重点があるものの、それだけではなく、医療の実践や宗教論、文化論などにも目配せをして、可能な限り多元的・包括的に論じようとしている。

というのも、生命倫理には、分野の違いにもかかわらず、共通した問題構造や視点が意外に多いからである。こうした共通点(あるいは、相違点)は分野横断的に見ていかなくは理解できないものなのだ。また、生命をめぐる問題は、その性質上、分野を越えて密接に影響し合うものだということもある。新たな技術の開発は直ちに法律問題や倫理問題を引き起こさずにはおかない。そして、法や倫理の解決策は宗教や文化の問題を無視して論じることではできないだろう。生命を

めぐる問題は必然的に学際的にならざるをえないのである。本書が「生命の」法と倫理ではなく、「いのちの」法と倫理であるのもこのためだ。ここで扱おうとしている生命は、単に生物学的な意味での生命だけではなく、文化的に解釈され、日常生活の中で実際に営まれている生命、つまりは「いのち」なのである。「いのち」は、それ自体、様々な側面を持った多元的な存在だとと言える。それに即して、本書も様々な側面から問題を論じようとしているのである。

第二に、それぞれの問題について、本書筆者なりの解答を導き出そうとしている点だ。概して教科書と呼ばれる本のスタイルは問題状況を客観的に記述し、様々な立場や考え方を並列的に紹介するものが多い。その方が教科書として「使いやすい」と考えるためだろう。しかし、本書はあえて解答の試みにまで踏み込んでいる。筆者もまた、読者と同じ地平に立って問題を考え、論じたいと思うからである。その意味では、教科書の範囲を超えていると言えるかもしれない。本書は、バットやボールを準備して「さあ、ゲームをやってください」というだけではなく、読者にまず第一球を投げる教科書だ。これを見送るか、打ち返すかは読者の自由に任せている。

また第三に、解答の試みにまで踏み込んでいることから、本書は特定のスタンスを持って書かれている。一口に言えば、それは現代リベラリズムに対する批判的スタンスである。

現代リベラリズムの公約的な立場は、一連の共有可能な正義原理の範囲内において、各人の選好するライフスタイルの多様性を可能な限り許容し、擁護することにあると言えよう。多種多様な価値観の共存する現代社会に適合した社会理論として構想されたものだ。そのため、そこで

イメージされる「いのち」は、成熟した理性的な判断能力を持った自律的個体であり、自分の生きる目標をみずから設定し、他者に服従したり、迎合したりすることなく、自分の人生を自分で計画する、まことに主体性の高い自我なのである。このようなリベリズムの「いのち」観に立脚して、生命倫理の領域においても、十分な情報提供に基づいた、各人の自己決定が最重要視されることになる。自己決定してこそ、自分の人生を自分で計画できるからだ。「生命倫理とは自己決定の倫理のことである」と断言することも少なくない。

しかし、このようなリベリズムの「いのち」に対する見方は、実際の生活世界に生きる「いのち」の現実を正しく反映しているのだろうか。「いのち」の現実には、むしろ、はるかに非選択的な出会いと偶然に満ちてはいないだろうか。それは、自分では選択不能な出生という偶然や親との出会いに始まるものだろう。こうした非選択的な出会いと偶然を受容し、そこに無類の価値を見出していくこと、そして「選べない関係」を「かけがえない関係」に変えていくこと、これもまた、現実生きる「いのち」の倫理なのではないだろうか。

もとより、このことは自由意志による自己決定の余地はないとか、自己決定を重視すべきではないとかという意味ではない。比喩的に言うならば、「いのち」の現実には非選択的な出会いや偶然という縦糸に自由意志による自己決定という横糸を滑り込ませることで織り上げられる複雑な織物のようなものだろう。決してどちらが欠けても織り上がるものではない。ただ、リベリズムがイメージするように、「いのち」はあらかじめ設計したり、プランに従って選択することだ

けで成り立つものではないということである。ネル・ノディングスはこう指摘する。

「人生は『プラン』と呼ぶにはあまりに複雑で、偶然に満ち、情念的なものだ。プランには目的や設計や一連の選ばれた手段が想定されており、そのため、きわめて狭い意味でテクニクや道具性に関心が集中している。人生は計画される (planned) というよりは組み上げられる (composed) ものだと言った方がずっと当を得ているように思われる。」

本書の「いのち」に対するイメージはこのようなものである。もしかりに、リベリズムのようなイメージに近い生き方のできる人がいるとするならば、それは能力的にも、社会・経済的にも特権的なほどに恵まれた、ごく一握りの人々に限られるだろう。自己決定の余地と能力を最大化することこそが生命倫理の「正しい」解答に接近することだと考えるのは生命倫理の問題を矮小化し、「いのち」の現実を持つダイナミズムを奪うことなのである。

以上のような特徴は、本書の前身『いのちの法と倫理』から引き継いだものである。前書『いのちの法と倫理』は幸いにも三版を重ね、このたび、版を改めることとなった。これを機に、今回は新しい執筆者を加えて全面的に内容を再検討し、単なる改訂ではなく、生まれ変わった新刊書として刊行することとなった。コンセプトは変わらないが、内容は新しい。前書同様、読者諸氏の忌憚のないご批判やご意見をたまわれれば幸いである。

なお、参照した文献については、本来ならば逐一、参照箇所を列挙すべきところだが、紙幅の関係もあり、巻末に一括して掲載させていただいた。また、前書と変わらず、法律文化社の方々

に深く感謝申し上げたい。ことに、田藤純子氏には様々なアドバイスや励ましをいただき、本書の完成に至るまで支えていただいた。また、野田三納子氏には編集の労をとっていただいた。改めて感謝申し上げたい。

二〇〇九年八月五日

執筆者一同